
弱虫の叫び

糸くず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱虫の叫び

【Nコード】

N0495T

【作者名】

糸くず

【あらすじ】

優しく繊細な青年。しかし何故か言葉使いが荒くなってしまい喧嘩を売られてしまう残念な子。そんな彼は間違った割り切り方をしてしまい町内一番の不良というレッテルを貼られてしまった！

そして高校入学後、色々な出会いが彼を変えていく。

注意・（これは厨二でエロゲ脳な人間が描く恋愛小説です）

プロローグ（前書き）

厨二な設定、エロゲ脳な物語、そして急展開な話数スピード。それでも「仕方ない読んでやるか」といつてくださる方は、どうぞこの駄文に目を通していただけると嬉しいです^^

プロローグ

「おらああ!! 待ちやがれ!!!」

路地裏を駆け抜ける青年たち。

その集団から離れて路地裏の先を駆ける青年は一人。
少し長い髪を銀色のリボンで結んだ男。

名前は 神田義人^{かんだよしと}

不良じゃないのに不良視される可哀想な青年である。

彼の性格は、別に荒いわけじゃない。

人が嫌い、善行が嫌い、悪い事がかっこいいなんて欠片も思っていない。

どちらかというと優しく、繊細な方だ。

だが、ひとつだけ問題がある。

口調だ。

彼の口は相当悪い。

誰が聞いてもそう思ってしまう程の口の悪さ。

それが災いと呼んでいる。

今もコンビニの入り口前で群がっていた不良達に「お前ら、邪魔だから。さっさと失せろよ、クズ」と言ったのが追いかけている

原因だ。

どう考えても喧嘩を売っているとは思えない。

当の本人もこれは流石にヤバイだろうと直そうとしているのだが、頭の中で考えた丁寧な言葉が罵倒となって口から出てしまう。

（「そこにいると他の人の邪魔になりますよ？」がどうやったらあんな言葉に変更されるのか…）

走りながらそう冷静に思考する。

途中ゴミ箱を後ろに向かって蹴飛ばしたりした気がするけど、それはご愛嬌。

こっちは捕まったら袋叩きなんだ。

少しくらいの反撃は許して欲しい。

「この糞餓鬼！」

「テメーも餓鬼だろうが！！（年齢そんな変わらないじゃないですか！？）」

勝手に変換されて更に事態は悪化する。

なんでこんなに口が悪いんだろ！？

喧嘩だって好きじゃない。

争いはなるべく避けたい。

なのに口の悪さで争いが生まれる。

（なんなんだこの悪循環！！）

そう心で叫びながら彼は走る。

だがそれも終わりみたいだ。

目の前に壁。

どうやっても乗り越えられそうにない。

文字通り《袋の鼠》。

「やっと追い詰めたぞコラ」

不良Aが息を切らしてそう言ってジリと距離を詰めてくる。

これはもう謝って出来るだけ被害を小さくするのが一番だろう。

そう思い口を開く。

「うるせえよ、糞野郎」

(…あれ?)

紡いだ言葉は謝罪ではなく罵倒。

所謂、売り言葉に買い言葉。

つまりこれが意味する事。

単純明快。

神田義人は今、ここで、彼らに、宣戦布告してしまったという事。

（ああ…もうどうにでもなれ！！）

こうして彼は吹っ切れた。

そして逆に、吹っ切れてしまうと神田義人は強い。

少なくとも喧嘩をしてこなかったわけではないのだ。
心得はある。

激昂して殺到する不良達に立ち向かう様に神田義人は駆ける。

それが中学二年の夏の出来事。

それから二年の月日が流れる。

神田義人は成長していた。

それは身体の事をさしていない。

いや、無論身体的な成長も遂げている。

だが中身は大きく変わった。

優しさや繊細さは変わらない。

だが、攻撃的になっていた。

不良に絡まれれば先に手を出した。

結局喧嘩するしかないのなら、先手必勝という考えに行き着いてしまったのだ。

そして、周囲の人間から完全に不良のレッテルを貼られてしまった。

最早神田義人は不良視される可哀想な青年じゃない。
不良になって恐れられる青年になった。

この違いは、かなり大きい。

それは理解者の人数の問題だ。

不良じゃないと知っていてくれる人達がいれば何事もなんとかなる。
だが彼が完全な不良になってしまった事で理解者が消えてしまった。

彼を庇う人間は最早家族以外にはいないのだ。

だがもう神田義人は諦めていた。

せめて家族は大切に。

それだけを守って生活をする事に決めたのだ。

そして、いま現在に至る。

町内きつての不良。

だが頭が悪いわけではない。

むしろ良い。

だから学校は良いところに行けた。

今は高校一年。

そう、高校一年の春。

ここから彼の本当の物語は始まる。

プロローグ（後書き）

あとがき

どうも初めまして。糸くずと申します。

こんな駄文を掲載して恥ずかしくないのか、といわれてもおかしくないレベルの文才へpへ

今回初投稿なわけですが、文才は本当にありません。

発想も厨二、そしてどこかにあったような設定ばかり。

オリジナルを書いていると必ずどこか似通っているものがあるのは仕方ない、と割り切ってくれるとありがたいです。

閑話休題。

オリジナル小説「弱虫の叫び」

タイトルに深い意味はありません。

そして小説内容もめっちゃくちゃになりそうです。

打ち切りもあり得るかも。。。なんて思ってますはいしません。

とにかく、主人公神田君がどうなっていくのか。。。成長物語、とは言いませんがそれに近いかもしれませんね。

ちなみにラブコメです。

厨二ラブコメです。エロゲ脳人間が書く物語ですから、ひどいものですよほんと↑

そんな感じになってしまいますが、読んでくださる方はどうぞよろしく願いします^^

糸くずでしたー

桜舞い散る裏庭で。(前書き)

第一話、と言えば良いのでしょうか。

正直設定がいまいちかもしれないので中々うまく書けません↑
これも試行錯誤の上の掲載なので。

更新は遅めになるかもしれませんが…orz

変わらず駄文ですが、どうぞご覧ください。

桜舞い散る裏庭で。

———
弱虫の叫び

桜舞い散る裏庭で。
———

桜が咲き誇る中、俺は高校に入学した。
評判も悪くなく、比較的落ち着いた学校だ。
男女比も同じくらいとんだかバランスの取れた学校。

そこの一年になったんだ。

俺がこの高校を選んだのには理由がある。

ひとつ。

望めば寮生になれる事。

親に、妹に迷惑をかけてきた俺は一人になりたいと思っていた。少なくとも居ないほうが家族にとってプラスに働く。そう考えていた。

母親からは止められた。

寮生になるなんて断固として許してくれなかった。

だが親父は許してくれた。

そう考えたんなら、行けと。

親父はなんだかんだで俺の味方をしてくれた。

母親は、なんというか、少し過保護だった。

まあ俺がこんな人間だからしょうがないと言えばそうなんだが。

妹は純粹に離れ離れになるのを嫌がってくれた。

でも、二週間に一回家に帰るという約束で頷いてくれた。

優しい妹を持てた俺は幸せなんだろう。

ふたつ。

この高校は生徒の自主性を強く重んじてくれる。

つまり、基本教員は俺たち生徒に関わってこない。

勿論授業や受験、相談事を持ちかけられたら対応してくれるが、それ以外では接しては来ない。

逆に言えば、生徒が不祥事を起こしてもこちらは関与しない、という保護者に向けての意思表示だが。

学校としてはどうなんだ、と考える人間もいるみたいだが実はこの

高校で不祥事が起きた事は一度もない。

小さい事ならいくつかあるだろうが、集会で報告されたり、保護者に連絡など、そういったものが一切起きていないのだ。
それはこの高校の《上手さ》を表している。

（世の中、上手く回ってるもんなんだな）

その台詞が合っているかどうかは判らないが、そう思った。

ちなみに、口の悪さを直そうとはもう思っていない。

出来るだけソフトに、そう考えるように変えた。

直すのは無理と挫折した、という事でもあるが。

そうこうして引越し準備が終わり、こうして校門を通り抜け、新たな生活に踏み出した。

だが、現実というのは残酷なもので。

学校にはひとつの噂が流れていた。

この学校にすごい不良が入学してきた、と。

どうやらその噂の人間は：俺らしい。

どうやって知ったのかは知らないが、俺を見る視線が随分と痛い。

俺だってそんな噂の人間にはなりたくなかったんだよ。

そんな心の中の悪態が聞こえるわけではない。

視線の全ては無視を決めこんだ。

拒絶というよりも、やっぱり無視。

関わっても仕方ない事。

問題を起こさなきゃそれで済むこと。

それだけ、たったそれだけの問題。

簡単に言えば、俺が冷めた人間に変わったんだろう。
環境の所為、とは言っても家族には恵まれていた。

母さんは俺が本当に悪い事をしないと信じてくれている。
親父は俺を守ろうとしてくれる。

妹は俺を無垢に慕ってくれている。

俺にはそれだけあれば十分だ。

俺の根底には、家族がいる。

だから今までの環境でも自分を見失わなかった。

喧嘩はするけど、あくまでも自衛の為。

相手に大きな怪我をさせた事はないし、させられた事もない。

思考は冷めてしまったけど、それでも俺は俺でいられた。

俺は、それだけで満ち足りている。

校舎に入り、指定されていた教室へと入る。

：ざわめきが止まった。

そりゃそうだろう。

噂の不良が同じクラスなんだからな。

銀色のリボン、それが噂の不良の目印。

これは妹がくれたもの。

だからいくら噂されても外す気にはならない。

俺は意にも介さず席へと座る。
こういう空気には慣れていた。
というか、これが俺にとっての普通だった。
元々が不良視されていたのだ。
好き好んで話しかけてくるのは俺を同類視する不良くらいしかいなかった。

だから俺には友達がいらない。
幼い頃から。

約一名、例外はいるけれど。

結局のところ、寂しくはなかった。
家に帰れば妹が遊ぼうとせがんできたし、母さんと話をするのが好きだったから。

友達が欲しくなかったわけじゃない。
友達なんか出来ないだろうと、いつからか諦めていただけ。

（そう考えると…俺相当寂しい奴だな…）

だが苦痛じゃないのだから仕方ない。

こういう奴に限って大切な人が出来て、それが離れていったら壊れるんだろうな、なんてため息を吐きながら考える。

これは母さんにも言われたから気をつけている。
人をあんまり信じないから信じて裏切られた時の反動が大きいとか
なんとか。

だからあんまり疑わないで接してきてくれた人間に対しては信頼は置かなくとも疑念は抱かない様にしなさいと。

：言ってる意味はわかる。

だが、実行しようにもどうすれば良いかわからない。
不器用な人間なんだな、俺は。

思考しているとチャイムが鳴り、教師が入ってきてホームルームが始まった。

はてさて、とりあえず真面目に聞いとくか。

そう思いながらも適当に聞き流している俺だった。

~~~~~  
~~~~~

「畜生、目立っちゃまった…」

ホームルームの時間のあと、まさか自己紹介をさせられるとは思わなかった。

しかも簡単に終わらせようとしていたのに教師によって引き伸ばされた…なぜか俺にだけ食いついてきやがった…

） 回想
（

「出席番号8番、神田義人。よろしく」

「それだけか？もう少しなにか言ってみろ」

「あ？…え…特にない」

「おいおい。自己紹介だぞ？…そうだな、得意科目はなんだ？」

「全部。苦手という教科はない。強いて言えば英語」

「ほう？部活には入るのか？」

「いや、帰宅部…といっても寮だけど」

「ほう…なら生徒会にでも入ったらどうだ？」

「冗談、俺は遠慮しとくよ」

「そうか。まあ気が向いたらやってみろ」

「…気が向いたら…ね」

） 回想終了 （

まさかあそこまで話しかけられるとは思わなかった。

周りの生徒には一言で終わっていたくせになんで俺だけ…

そんな風に不貞腐れてカバンを肩にかけて教室を後にする。

今日は顔合わせと説明だけで終わった。

この後は部活見学などで時間を潰すことになっている。

だが俺は部活に所属する気はない。
だから俺はこれで帰宅となる。

だが、何故だろうか。

今日はなんだか歩きたい気分だった。

だから校舎や校庭を練り歩く事にした。
教室の場所を覚えると言う名目もある。

この学校は五階まであって、上から一年教室、二年教室、三年教室、特別教室及び職員室、そして最後にまた特別教室。

校庭は広い。

運動部が多いこの学校ではやはり運動部の場所取り合戦が絶えないらしい。

その為に校庭は広く大きくしたみたいだ。
学校から少し離れた場所には別のグラウンドが用意されてある。

流石にそこまで行く気にはなれない。

俺は適当に校舎を練り歩く。

まずは最上階、一年教室フロア。

まだ多くの生徒が残っているのか少し騒がしい。

友達作りに精を出しているのか、まだぎこちない雰囲気も感じる。
そして俺を見る視線も多い。

噂はどうやら一年の間で完全に回っているらしい。

まあ仕方ない。

次にいこう。

そして二年生フロア。
ほとんどが部活に出たのか、少し閑散としていた。
だが教室で話していたりする生徒もそこそこにいた。
なにやら楽しそうに何かに興じている。
よく見ればトランプ。

（暇なんだな…）

そんな感想を漏らして階段を下りる。

三年フロアは静かだったが人がいないわけではない。
どうやら勉強中らしい。

この学校は比較的進学率が高い事から自主勉は欠かせないらしい。
受験なのだから当然なのだろうが、皆の目が本気すぎて少し不気味
な雰囲気でした。
だからさっさと移動。

特別教室及び職員室フロア。

何人か教員が移動している。
挨拶をされたら返し、そのまま特別教室の場所を確認していく。
ここには音楽室、美術室、技術室、図書室、生徒指導室などがある。
ちなみに生徒指導室は進路指導室とは別物。

「あら？あなた新入生？」

「あ？…そうだけど」

声をかけられ、俺は素っ気無くそう返した。
普通ならこの返しに教師は顔をしかめるか嫌悪感を抱くのだろうが

彼女はそうではなかった。

むしろ笑顔。

すげえ笑顔。

もうにこにこっていう擬音が似合いまくってますってくらいの笑顔。

「私は新任の教師なんだけどね、あなた音楽か生徒会に興味ないかしら？」

「どっちもない。というか新任教師って事はわかったが名前は言わないのか」

そういうと彼女、新任教師は慌てたように「あ、わ、私は蓮野愛実っていうの。よろしくね」

なんとも初々しい教師だ。

それに、彼女は所謂美人というやつだろう。

だが何故かずっと笑顔だから幼い印象を持つ。

きっと生徒からの人気を勝ち取れるタイプだろう。

しかも愛されるキャラだ。

「あなたは？」

「神田」

「神田君ね！…えっと、何組になったのかな？」

「Aクラス」

「うわ、山上先生のクラスだ…」

何故か顔をしかめる。

何か理由があるのだろうか。

「あ、ごめんね。神田君は部活には入るのかな？」

「いや、興味ない。帰宅部」

「そっかあ…もったいないなあ。折角の学園生活なんだから部活は何かやった方がいいよ？」

「…。んで、なにか用？部活勧誘なら他所で頼む」

「ええ…：やろうよ一緒に音楽…：」

何が何でも誘いたいらしい。

初対面なのに馴れ馴れしい人だな。

音楽は出来ないわけじゃない。

妹がピアノをやっていて、せがまれて一緒に何回もやっていた。それに軽くならギターも弾ける。上手くはないが。

だから出来ないわけじゃない。だがする気にはならない。

「音楽…：やろうよ…：」

情けない声で俺に迫る。

正直、うざったい。

「やらない。じゃ」

背を向け、歩き出す。

背後から「ま、待ってよー!!」とか聞こえたが、そんなものは知らない。

きつと空耳だろうと足早にその場を去った。

~~~~~

軽く空腹を感じた。

腕時計に目をやると時刻は一時になろうとしていた。

食堂は今日からやっていると言っていた筈。

試しに行ってみよう。

そう思い足を向ける。

だが、そう言えば今日は弁当を持たされていたのを忘れていた。

今日は自宅から直接学校に来た。

その時持たされたのだ。

ならば今は行く必要はないと歩先を変える。

中庭には何人か人が居そう。

別の場所：そう、裏庭なんかどうだろうか。

スタスタ歩いていき校舎裏にある少し離れた庭へと赴いた。

そこは、何故か落ち着く空間だった。



日の光が優しく、そよ風が心地よく吹き、何故か幻想的。  
きっと光の加減でこう見えるのだろう。

そして印象的なのが芝生の中央、そこに根付いた大きな桜の木。  
風が吹くとひらひらと舞う桜の花弁。  
綺麗だった。

校舎裏と言っても、それなりに距離もあって人もあまりやってこない。

俺は良い場所を見つけた、そう思い近くの芝生に胡坐をかき弁当を広げる。

母さんの弁当は美味い。

昔プロの料理人だったらしい。

親父も母さんも昔語りをする人じゃないからよくは知らないが、ちらほらと何か言っていた事は覚えている。

一人黙々と箸を動かす。

空腹もあつたせいかな、弁当はすぐに空になってしまった。

四月の爽やかな、少し肌寒いそよ風に吹かれてぼーっと空を眺める。

そこで俺は確信した。

少なくとも、ここは今までより平穏に過ごせる場所だ。

素行の悪い生徒はそうそう居ないだろう。

無闇な接触をしなければ俺はそこまで注目されずに存在も薄まる。  
噂はすぐに消せるかもしれない。

そう考えて安堵のため息を吐いた。

少しは平和に過ごせるだろう、そんなため息。

とにかく、俺がこれからの生活で重要視すべきは目立たないこと。  
目立てば何かと面倒事が舞い込んでくる。

そんなのは御免だ。

目立たず、騒がず、問題を起こさない。

これらを守れば平穏な生活が出来る筈。

決意新たに、食べ終わった弁当箱を片付け立ち上がる。

帰るにはまだ早い時間だ。

散歩を再開しようと歩を進めた時、視界の端で誰かが居る事に気がついた。

そこは木々の陰になっていて、あまり良く見えない所。  
何故気付いたかと言うと、声が聞こえたから。

いや、声、というよりも…。

(…泣き声?)

すすり泣くような、か細い声。

じっ、と目を凝らす。

そこには一人の女の子がいた。

膝を抱えて泣く、女の子が。

何があったのかはわからない。

けれど、悲しそうに、泣いていた。

（…厄介な出来事に立ち会っちゃまったな）

ため息一つ、俺は関わらないように、気付かれないように踵を返す。

と、しようとした。

だけど、なんだかほっとくのも何故か躊躇われた。

こんな状況に立ち会った事なんて、なかった。

だからどうすれば良いのかわからない。

経験不足、なのだろうか。

それよりもこんな状況そんなにあるものなのだろうか。

よくわからない。

第一、こういう時ってほっといた方が良いのじゃないだろうか。

知らない人に大丈夫か、何があったと訊かれても、話せるわけもないし…。

（くっそ…とりあえず…）

わざと足音を立てて女の子の下へ歩いていく。

女の子はそれでも気付かない。

「…ひつく…うえつく…ずず…」

これは余程悲しい事があったのか…。

声をかける事が躊躇われた。

しかしここまで近づいて何もしないで引き返すってのは周囲の人間が見てどう見えるのか。

…確実に変人である。

「おい。聞こえるか」

意を決して声をかける。

出来るだけ優しく、出来るだけそつと。  
でも言葉のチョイスは変わらなかった。

「…っ!!」

女の子はビクツとして、顔を上げた。

綺麗な顔立ちをした女の子だった。

長い髪がさらっと肩から流れた。

上げた顔は赤みを帯びていて、瞳からはまだ涙が流れていた。

「…これ、使え」

俺は目を逸らしてハンカチを差し出す。

慣れない行動の所為か、俺の顔も赤くなってきた。

鏡を見てないからわからないが、きつとそうだ。

ものすごく熱い。

「…あの」

女の子が口を開く。

だが俺はグイッとハンカチを押し付けるように、さっさと取れと催促する。

「…あ、ありがとうございます」

女の子が受け取ってすぐに俺は振り返り歩きだした。

「あ、あのっ」

女の子の声が俺を引きとめた。

本当は止まりたくなかったけど、一度立ち止まって言葉を返す。

「何があったのか知らねえけど、泣くな。ハンカチはやる」

それだけ言ってさっさとその場を去る。

心臓が爆発を起こすかと錯覚するくらい鼓動していた。

慣れない事はするものじゃない。

そう実感した時間だった。

**桜舞い散る裏庭で。 (後書き)**

ひどい厨二病だ。。。重症さね。。。orz  
まあいつか。

というわけでヒロイン登場。

次話で絡めるかなあと少し不安だったり↑

次話で詳細を出したりしたいとは思っていますがうまく書ける自信がないっていう↑

はてさてこんな駄文小説「弱虫の叫び」ですが、どうぞ読んでくれる方、気に入ってくれた方は、次もどうぞよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0495t/>

---

弱虫の叫び

2011年10月9日02時45分発行